

2015年2月15日 主日礼拝

説教「赦しの神さま」

マタイの福音書 18章 21-35節

【罪とはなにか】

私たちには、罪を悔い改めようとしても、何も思い浮かばない、そういう経験があります。罪とは、なんでしょう？ある人は、「自分の罪と言われてもよくわからない。けれども、よくわかる罪というのがある。それは、自分に対してだれかが犯した罪。これは、はっきりわかる。『自分は傷つけられた、自分は満たされていない、それは相手の罪だ』と、そういう形でなら罪がわかる」と言いました。罪のもっている影響は大きいものです。罪は人の心に食い込んで傷つけ、傷ついた人をさらに他の人を傷つける罪に駆り立てるのです。

罪を赦すというのは、難しいことです。赦そうとしても、心がついてこないのです。心から赦して、相手を受け入れることは、とても難しいものです。心が傷ついているから、一度赦すのでさえ、ほとんど不可能なほど難しいことなのです。

【七度の七十倍？】

当時のユダヤのラビたちは、三度まで赦せ、と教えていたようですが、ペテロは七度までかと訊ねました。この言葉はずいぶん思い切った言葉です。教会の仲間を七度赦そうというのは、あっぱれと言うべき覚悟でした。

ところが、主イエスは「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います」(22)とおっしゃいました。どこまでも赦すようにとおっしゃったのです。

【レメクには七十七倍】

創世記4章にレメクという人物が登場します。弟アベルを殺したカインの末裔です。神さまは、罪を犯したカインをかばって「だれでもカインを殺す者は、七倍の復讐を受ける」(4:15)と言ってくださいました。ところが、レメクは「カインに七倍の復讐があれば、レメクには七十七倍」(4:24)と言うのです。「おれに手を出してみろ。七倍どころではすまないぞ、七十七倍の復讐をするぞ」と言ったのです。カインの家系の者にとって、いや、全人類にとって宝のような神さまのことばである「七倍の復讐」をレメクは踏みにじってしまいました。そして復讐を拡大しました。こうして赦さないことが当たり前のように、人から人へ、鎖の連鎖のように、広がっていきます。

主イエスは、これとは正反対の鎖の連鎖を始められました。復讐の連鎖をとどめ、神さまのあわれみに生きる新しい生き方をもたらされたのです。それは赦す生き方。神さまのあわれみの中に生き、神さまのあわれみの連鎖をとどめない生き方です。七度の七十倍と主イエスが言われたのは、どこまでも赦し、どこまでもあわれみ、覆うころでした。

【仲間を赦さないしもべの譬え】

この生き方を弟子たちの心に刻みつけるために、主イエスは印象深いたとえを語ってくださいました。一万タラント(6000億円)の借りのあるしもべを、王(神さま)は「かわいそうに思って」(27)赦しました。「かわいそうに思って」は「はらわたが動く」ということば。神さまが「はらわた」が動いて痛むほどにあわれみに思ってくださいます。だから、罪人を覆ってくださいます。そのように覆われた私たちは、ただあわれみによって、赦していただいたのです。悪の鎖の連鎖の中で、赦し合うことができずにいる私たちのために、御子を十字架につけてくださった神さまのあわれみによって覆われたのです。

ほんとうだったら、ここからあわれみの鎖の連鎖が始まるはずですが、赦しの恵みの連鎖が始まって当然なのです。ところがこのしもべは、そうしませんでした。赦すことを惜しんだのです。このことは、王を、つまり神さまを怒らせることでした。怒らせる以上に悲しませることでした。

神さまに赦され受け入れられ、仲間にも赦され、受け入れられている私たちです。この喜びの中にとどまり続けるために、仲間にも覆ってもらい、赦してもらい、その赦しを受け入れるのです。そして自分も仲間を赦すのです。何度でも、何度でも。